

慣習法文書の性格の再検討  
—エノー伯領におけるブルゲンセスと聖人衆—

Réexamen des caractères des charte-lois

— Les *burgenses* et les *sainteurs*  
dans le comté du Hainaut —

斎藤 綱子

SAITO Keiko

本研究は、慣習法文書（charte-loi）の史料的性格を再検討しようとするものである。

慣習法文書が都市と農村を問わず領主と所領民との間の既存の慣習法的諸権利を成文化した文書という理解が、長く西欧ひいてはわが国の中世史研究者の間での通念であった。しかし最近20年余の間にだされた研究をみると、二つの点が注目される。一つは、都市・農村を峻別せずに共同体に関わる文書という見方を受け止めながらも、実際には農村的居住地の法として扱われる嫌いがあり、第二次大戦以前の捉えかたに戻った傾向すらも感じられることである。第二点は、1960年代頃から文書賦与における領主の主導力が強調され、共同体と領主の双

務的内容が指摘されてきたが、最近ではますます領主の利益に比重をおく見方が強くなってきている点である。近來の研究は、「領主と共同体との関係を規定した文書」という捉え方を前提にしながらも、領主にとって所領もしくは領邦の支配の安定を保証する文書という視点を強く打ち出しており、その限りで慣習法文書研究は新しい局面を迎えたと思われる。

慣習法文書が都市・農村の共同体の生活を知る上で重要な史料であることが周知のことであるが、そのことは、慣習法文書が発給された時代に何を意味したのかとは別個の問題である。本研究は、同時代人にとって慣習法文書がいかなる意味をもったのかを改めて検討しようとするものである。

申請者は慣習法文書発給に作用する領主の利益を否定するものではないが、他方で、領主にこのような方向で慣習法文書の利用を志向させた状況（特に所領民の暗黙の力）を明らかにすることが必要と考える。申請者が慣習法文書の内容の享受者について改めて検討しようとするのはこの故である。

慣習法文書の享受者として通常分類されているのが、ブルジョア *burgenses*、他所者 *extraneus*、聖人衆 *sanctuarii* である。しかし、*burgenses* が通常自由保有農とされて彼らへの領主制的賦課が分析され、その共同体の機構が明らかにされることはあっても、後2者が慣習法文書起草にどのように位置づけられていたのかについては、これまで問題とされてこなかった。本研究では、ソワニーの聖人衆（聖ヴァンサン衆）に関する史料の分析を通して、慣習法文書と聖人衆との関係を究明することに努めた。

エノー伯領の聖人衆については、L. ヴリーストの *Le servage dans le comté de Hainaut* にかなりの史料があげられているが、この著作の1年前にヴリーストはソワニーの聖ヴァンサン教会の聖人衆の未刊行史料をまとめている（L. Verriest, *Documents inédits relatifs aux saints du chapitre Soignies, Annales du cercle archéologique de Soignies*, t.14, 1909, pp. 97-196）。ここには1172年から1339年までの62通の史料が掲載されているが、本研究では12-13世紀に発給された35通の文書を分析した。これらの史料にはソワニー外に居住している自由人・農奴の托身に関するものであり、ソワニーに居住する聖人衆は現れない。

他方、1142年ソワニーの聖ヴァンサン教会とブルジョアの請願に対してエノー伯ボードワン4世が発給した慣習法文書の18条に、「誰であれ町の中に居住し、聖人に従属する者は、聖人に負うものを支払い、自由であるように」とされている。これらの聖人衆は聖ヴァンサン衆

とは限らない。実際にモンズなどの他都市においてかなりのブルジョアが聖ヴァンサンやモーボージュの聖アルドゴンドに托身しているように、居住地の教会に属していない場合がある。ブルジョアと聖人衆の身分は並列されるものではなく、ブルジョアが居住地の自由の享受を通して領主の要求を忌避することへの懸念が18条に現れていると思われる。

領主と所領民といった対時的表現では整理しえない関係の中で人々は生活しているのであり、慣習法文書はそのような曖昧さ、矛盾を含む関係を包摂するものと言えるのではあるまいか。